

日本の庭－安らぎと趣をもたらす空間

藤原 道夫

庭のことを書くと、イギリス人に触れずにすまされない。チャールズ皇太子は語っている「ガーデニングほど面白いことはない、すべてを忘れて没頭することができる。育てた苗が思い描いたように花を咲かせるのは、このうえない幸せをもたらしてくれる」。多くのイギリス人愛好家を代弁しているかのよう。人々は秋から、来年はどこにどの花をどのように咲かせようか腐心する。マナー・ハウスが点在する地方では盛期に庭園が公開され、見学用のガイドブックが出るとか。映像で映し出された花に溢れる庭は確かに美しく、持ち主の達成感・満足感がみてとれた。ただし、庭の輝きは短い期間に限られる。

イギリス人を自称したラフカディオ・ハーンは、イギリス式庭園を好まなかった。彼は日本の庭に魅せられてしまう。それも大名屋敷や大きな寺院にある立派な庭園ではなく、中級武家屋敷の池のある庭だ。四季折々咲く草花、木の花、飛び交う蝶やトンボの姿を目にし、小鳥のさえずり、蝉や蛙の鳴き声、虫の音を耳にし、彼は昔ながらの安らぎと趣を感じるこの庭を賛美した。

日本の庭は、優れた技術を持った庭師をとおして様々な形に発展していく。規模の大きな例が桂離宮だろう。より小規模な庭の典型的な例は、南禅寺界隈（京都市左京区）の別荘群にみられる。これらは残念ながら無鄰菴（山縣有朋の造営）を除いて見学することができないので、映像を基に想像してみる。

疎水から水を邸内に引き込み滝、小川そして池が造成される。水辺では石組みが肝心だ。周りにどんな木をどのように植えるか、四季を通しての変化を見通す力量が問われる。建物と庭との調和も考慮せねばならないし、また借景も巧く取り入れたい。施主と庭師の創意により、安らぎと趣を与えてくれる空間が出来上がっていく。

今住んでいる集合住宅はコの字型の8階建てで、2,200 m²ほどの中庭がある。滝が造られ、石組みから落ちる水は小川となって小さな池へと流れ落ちる。一見単純な長方形だが、よくみると凝った造りの広い池もある。庭には様々な木々が植えられ、四季を通して楽しめる。日本の庭について書きながらこの庭のよさに改めて感じ入り、毎朝深く息を吸いながら小径をたどって一回りするのが習慣となっている。